



豊田講堂

—Toyoda Auditorium—

山口拓史
堀田慎一郎

豊田講堂

— Toyoda Auditorium —

山口 拓史
堀田慎一郎

目次

はじめに	2
一 前史―名帝大創設時の「約束」	4
二 東山地区の整備	13
三 豊田講堂の建設寄付	19
四 豊田講堂完成式典	32
五 ランドマークとしての豊田講堂	38
六 現在の豊田講堂	45
おわりに	54

はじめに

名古屋大学が、本日ここに、トヨタ自動車工業株式会社並びに豊田家御一家の絶大なる御好意に浴して、かくも立派なる講堂の建設寄贈を受けたことは、名古屋大学は勿論のこと、日本文化のために慶賀にたえぬことであり、感謝感激の至であります。

右の文章は、一九六〇（昭和三五）年五月に挙行された豊田講堂完成式典において配布されたパンフレット『名古屋大学豊田講堂 一九六〇』の冒頭に掲げられた、勝沼精蔵によるあいさつ文の一部です。勝沼は、一九四九年七月から一九五九年七月までの一〇年にわたって名古屋大学の第三代総長を務めた人物です。豊田講堂完成式典が行われた時、勝沼はすでに総長を退任していましたので、右のあいさつ文は名古屋大学前総長という肩書きで記されています。

ところで、国内の歴史ある多くの大学には、その大学を代表する建築物や記念物などがあります。たとえば、北海道大学の農学部建物、東京大学の大講堂「安田講堂」や赤門、京都大学の時計台記念館、早稲田大学の大隈講堂、慶応義塾大学の図書館旧館や三田演説館、同志社大

学のクラーク記念館など、重要文化財等の指定を受けているものも少なくありません。

名古屋大学の場合、東山地区のシンボリックな建物といえば、やはりキャンパスの中央部分に並び立つ豊田講堂と旧古川図書館（現在の博物館）ということになるのではないでしょうか。これらの二つの建物については、すでに名大史ブックレット4『豊田講堂と古川図書館―名古屋大学の寄付建物―』（堀田典裕・木方十根共著、二〇〇一年）において、主に建築学的な角度から詳細に取り上げられています。

本書では、これら二つの建物のうち前者の豊田講堂について取り上げたいと思います。その際、同ブックレット4の内容との重複をできるかぎり避けながら、豊田講堂が名古屋大学に寄付された経緯や名古屋大学における同講堂の存在意義などに焦点をあてて紹介していきたいと思えます。

また、増補版においては、名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）を記念して実施された、二〇〇七年一二月竣工の、豊田講堂の改修・増築工事の概要や竣工後の様子について新たに書き加えました。

さらに第三版では、国の登録有形文化財としての登録及びBELCA賞の受賞（二〇一一年）、公共建築賞・特別賞の受賞（二〇一二年）といった、最近のトピックスについての記述を増補しました。

一、前史―名帝大創設時の「約束」

◆前史

二〇〇四（平成一六）年四月一日、全学八九の国立大学が一斉に国立大学法人に変わりました。もちろん、名古屋大学も例外ではなく、その日から「国立大学法人名古屋大学」（以下、名古屋大学といいます）としての新たな第一歩を踏み出しました。名古屋大学にとつてこの年は、一九四九年五月三十一日に新制大学として再出発して以来の、大きな節目の年となりました。そして二〇〇九年、名古屋大学は創立七〇周年（創基一三八周年）を迎え、一〇月に記念式典が挙行されました。一九三九（昭和一四）年に名古屋帝国大学（以下、名帝大ともいいます）として創立されて七〇年、一八七一（明治四）年の名古屋県仮病院・仮医学校を起点とする前史（表1参照）までを含めると一三八年です。

名古屋大学は、最後の帝国大学として創立され、総合大学としての歴史は決して古くありませんが、その前史を含めれば、日本の大学で有数の長い歴史を持っています。

表1 名古屋大学前史（名帝大創設まで）

西暦（和暦）	事 項
1871（明治4）	名古屋藩評定所跡に仮病院を設け、町方役所跡に仮医学校を設置する。
1872（明治5）	仮病院を閉鎖し、義病院を仮設する。仮医学校を閉鎖する。
1873（明治6）	義病院を閉鎖する。西本願寺掛所に仮病院を開設する。仮病院内に医学講習場を設置する。
1875（明治8）	仮病院を愛知県病院とする。
1876（明治9）	愛知県病院を公立病院、医学講習場を公立医学講習場と改称する。公立医学講習場を公立医学所と改称する。
1877（明治10）	病院・医学所が天王崎町へ新築移転する。
1878（明治11）	公立医学所を公立医学校と改称し、病院から独立する。
1881（明治14）	公立病院を愛知病院、公立医学校を愛知医学校と改称する。
1901（明治34）	愛知医学校を愛知県立医学校と改称する。
1903（明治36）	愛知県立医学校が「専門学校令」による愛知県立医学専門学校として新発足する。
1908（明治41）	愛知県立医学専門学校・愛知病院の移転改築予算が臨時県会で認められる。
1914（大正3）	愛知県立医学専門学校・愛知病院の鶴舞移転建物が竣工し、移転を開始する。
1915（大正4）	新築開校記念式・新築落成祝賀記念大運動会を開催する。
1918（大正7）	愛知県会が総合大学設置に関する建議を可決する。
1919（大正8）	愛知県立医学専門学校校友会が昇格期成同盟会を組織する。愛知県会が公立医科大学設置の建議を可決する。
1920（大正9）	愛知医科大学が発足する。
1922（大正11）	愛知病院を愛知医科大学病院に改称する。
1930（昭和5）	愛知県会が緊急建議「愛知県会ヲ以テ愛知医科大学ノ国立移管ヲ望ム」を可決する。
1931（昭和6）	愛知医科大学を官立移管し、名古屋医科大学が発足する。
1935（昭和10）	愛知県会が愛知県に総合大学を設置する建議を可決する。
1937（昭和12）	愛知県会が総合大学設置の建議を可決する。
1938（昭和13）	名古屋市会が「総合大学設置ニ関スル意見書」を可決する。帝国議会在が「名古屋帝国大学設立ニ関スル建議案」を可決する。愛知県が大学設立準備調査会を設置する。名古屋商工会議所会頭を会長とする名古屋総合大学設置期成同盟会が発足する。
1939（昭和14）	文部省が名古屋帝国大学創立委員会を設置する。名古屋帝国大学官制（勅令120号）により名古屋帝国大学が創設される。

◆名帝大創設と地元による支援

本書では、紙数の関係もあって、名帝大創設にいたる詳細な経緯について述べることはできません。しかし、名帝大の創設に際しては、地元である愛知県・名古屋市、さらには名古屋商工会議所などからの多大な支援を受けています。

さらにいえば、名帝大の創設の時だけではなく、その前身校にあたる官立（＝国立）の名古屋医科大学や公立の愛知医科大学が発足した際にも、愛知県をはじめとする地元からの大きな支援を受けています。

以下では、名帝大の創設に際して、愛知県・名古屋市・名古屋商工会議所などの地元がどのような支援を行ったのかについて、少し具体的に紹介しておきたいと思えます。

◆総合大学設置運動

第一に、愛知県をはじめとする地元は、愛知県に総合大学を設置する運動を強力に展開しました。表1からもわかるように、愛知県会は、一九一八年以降数回にわたって、総合大学の設置を求める建議を可決しています。

また、一九三八年七月一六日には、青木鎌太郎名古屋商工会議所会頭を会長とする名古屋総合大学設置期成同盟会が発足しています。この設置期成同盟会は次のような役員で構成されて

おり、文字どおり、地元の産官学が一丸となって名帝大の創設に向けた運動を展開したことを物語っています。

会長 青木鎌太郎（名古屋商工会議所会頭）

副会長 豊田利三郎（名古屋商工会議所副会頭）、高松定一（同上）

顧問 小山松寿（衆議院議長）、田中広太郎（愛知県知事）、大岩勇夫（名古屋市長）、伊

藤次郎左衛門（名古屋商工会議所顧問）、岡谷忽助（同上）、田村春吉（名古屋医科大学学長）、勝沼精蔵（名古屋医科大学附属医院長）、永田安太郎（愛知県会議長）

◆創設費用の負担

第二に、名帝大創設に際して愛知県は、総額九〇〇万円の創設費を国に寄付しました。表2は、一九三九年の第七四回帝国議会で可決された名帝大創設予算の総額と支出年度を示したものです。これに基づき、愛知県は一九三九年度に名帝大創設費九〇〇万円（創設費四〇〇万円＋営繕費五〇〇万円）を国に寄付し、国は支出年度割に従って六カ年間の継続支出によって名帝大の創設を完成させることが予定されたのでした。

表2 名帝大創設費の予算

(単位：千円)

	総額	支出年度割					
		1939年度	1940年度	1941年度	1942年度	1943年度	1944年度
創設費	4,000	400	500	500	700	700	1,200
設備費	3,900	385	485	485	682	682	1,181
上記以外	100	15	15	15	18	18	19
営繕費	5,000	100	600	700	1,200	1,200	1,200
工事費	4,762	80	565	665	1,150	1,150	1,152
上記以外	238	20	35	35	50	50	48
計	9,000	500	1,100	1,200	1,900	1,900	2,400

◆敷地の現物寄付

第三に、名帝大の創設に際して愛知県は、その敷地を現物寄付しました。これについては、一九三九年三月一三日付で文部大臣から内閣総理大臣に提出された「名古屋帝国大学官制理由書」の中に、第二の創設費寄付とも関連する次のような記述がみられます。

(前略)：帝国大学ノ創設地トシテハ現在名古屋市ヲ措イテ他ニ之ヲ求ムルコト困難ナルノミナラズ帝国大学分布上ヨリ見ルモ最モ適當ナル位置ニ在リ。加フルニ愛知県ヨリ名古屋帝国大学創設ニ要スル経費九百万円並ニ敷地約十八万坪ノ寄附申出アリタリ。

依ツテ右寄附ヲ受納シ昭和十四年度ヨリ名古屋帝国大学ヲ創設シ医学部ハ昭和十四年四月ヨリ、理工学部ハ同十五年四月ヨリ之ガ授業ヲ開始セントスルモノナリ。

(「名古屋帝国大学官制理由書」『公文類聚』より)

◆図書館と講堂の現物寄付

第四に、愛知県は、右の第二（創設費負担）や第三（敷地負担）とは別に、図書館と講堂を現物寄付する方針を示しました。一九三九年一月二八日付の新聞『新愛知』によると、当時、愛知県の田中知事が名帝大創設費のほかに建築費が約七五万円の図書館と約二五万円の講堂を設置する方針を持っていたこと、さらに、田中知事が名古屋商工会議所の青木会頭に図書館と講堂の建物寄付を依頼して快諾を得たことが報じられています。

なお、田中知事からの寄付依頼に対して、青木会頭が会長を務める名古屋帝国大学設置期成同盟会では図書館と講堂の建築費として約一〇〇万円の寄付を集めました。

◆実現しなかった図書館と講堂の寄付

しかし結局のところ、名帝大創設の際に図書館と講堂の現物寄付を受けることはできませんでした。当時、戦時体制下での物資不足と物価高騰が著しく、実際の建築に着手することができなかつたのです。

その結果、名古屋帝国大学設置期成同盟会によって集められた約一〇〇万円の寄付金は、戦後まで名古屋商工会議所の預かりとされたのでした。

◆新制名古屋大学の発足

第二次世界大戦後、いわゆる六・三・三・四制と呼ばれる新学制が一九四七年度から始まりました。この学制改革によって、旧制度下の高等教育機関は大きく再編統合されて、一九四九年度からいわゆる新制大学が発足しました。

ただし、名古屋大学の場合は、他の帝国大学と同様に名古屋帝国大学が一九四七年度に旧制の名古屋大学に改称され、その後一九四九年度に改めて新制の名古屋大学に移行するという形になっています。そして、新制大学への移行の際に、旧制の高等教育機関であった第八高等学校、名古屋経済専門学校、岡崎高等師範学校などを包括しました。

以下では、新制名古屋大学への移行に向けた取り組みの中から、戦前期において実現しなかった図書館と講堂の現物寄付に関するものを取り上げておきたいと思えます。

◆「新制名古屋大学の構想」

一九四八年二月、名古屋大学では、翌年度からの新制大学への移行に際しての基本方針として、「新制名古屋大学の構想」を確定しました。この「構想」は「学部学科の充実」と「土地建物の利用及復興」の二部構成で、その後者には次のような記述がみられます。

二、土地建物の利用及復興

本学は、曩むかしの戦災で多大の損害を蒙まかっているのでこれが本復旧は新設学部と共に名古屋市の計画する文教地区としての東山に集中する（但し附属医院は現在の鶴舞地区に分院として存置する）計画であるが現下の国家財政状態では当分実現不可能であるから今後の包接拡充のものと共に応急対策で行く

159（略）

10 図書館講堂は名古屋総合大学創設当時の約束通りに有志寄附金を以て東山に文教地区の文化中心にふさはしいものの現物寄附マを設けるコ

◆「名古屋大学将来計画の概要」

一般に、新制大学への移行に際しては、文部大臣に設置認可申請書というものを提出し、その設置の認可を受ける必要がありました。名古屋大学においてもこの設置認可申請の準備として、一九四八年六月の段階で設置認可申請書の中核にあたる「名古屋大学設置要項」と「名古屋大学将来計画の概要」が作成されています。そのうち、後者には次のような記述がみられます。

三、校地校舎等に関する事

名古屋市千種区東山所在の本学敷地十六万余坪を拡張して、六十余万坪とし東山公園動植物園を含めた文教地区とする。

名古屋市復興都市計画に同調して、市内各地に分散している各学部を此の地に集め図書館、博物館、講堂を中心に本建築し、東海唯一の完全総合大学として、名実共に教育文化の中心たる役割を果たさんとする。

◆名帝大創設時からの「約束」

以上のように、名帝大創設の当初から予定されていた図書館と講堂の現物寄付は、戦時下・終戦後を通じてさまざまな事情から、先送りにされてきたのでした。

しかし、そうした悪条件の中にあっても、名帝大創設時の「約束」を無効にすることもなく寄付実現に向けた取り組みを継続した愛知県をはじめとする地元の支援があったからこそ、次章以下で述べる建物現物寄付が実現したという事実を、私たちは決して忘れてはならないと思います。

なお、これまで本書で述べませんでした。が、名帝大創設以降、新制名古屋大学になって東山地区に豊田講堂の寄付が行われるまでの間は、鶴舞地区の医学部構内にあった図書館（愛知医

科大学時代に建設された図書館）内の講堂が名古屋大学の唯一の講堂でした。

二、東山地区の整備

◆名古屋大学整備計画―東山地区への集結プラン―

第二次世界大戦敗戦以降、名古屋大学は、戦災校舎等の応急復旧作業と一九四九（昭和二四）年度からの新制大学への移行準備を並行して行わなければならない状況にありました。その結果、名古屋大学の各部局・施設は、名古屋市を中心としながらも愛知県内の一〇余りの地区に分散する形になっており、いわゆる「たこ足大学」とも呼ばれる状況にありました（図1参照）。

そこで、名古屋大学は、一九五二年に大学としての整備計画をまとめました。現在、この整備計画の内容を示す直接的な資料は発見されていません。しかし、間接的な資料から推測して、この整備計画の基本方針は次のようなものであったと考えられています。

- (一) 医学部と附属病院は鶴舞地区、農学部は安城市、空電研究所は豊川市（いずれも当時の所在地）においてそれぞれ整備する。
- (二) 前記以外の部局は、東山地区に集結させて整備する。
- (三) 附属図書館と講堂は、名古屋帝国大学創設当時の約束どおり、地元からの寄付を仰ぐ。
- (四) 校地の拡張については、国費による。

なお、この整備計画の完成予定年数については、それぞれ鶴舞地区と東山地区が一〇カ年、附属病院が五カ年とされました。また、整備着手の順序については、第一期計画（最初の三カ年）として工学部・医学部・附属病院・理学部の一部の整備を先行させ、その後の第二期・第三期計画として残された部分と新設された学部の鉄筋建築を完了させることとされました。

◆東山地区敷地の追加取得

その後、右に述べた名古屋大学整備計画は、何度かの修正を受けながらも、一九六〇年代半ばまでにおおよそが実施されてきました。ここでは、東山地区の整備についてみておきたいと思います。

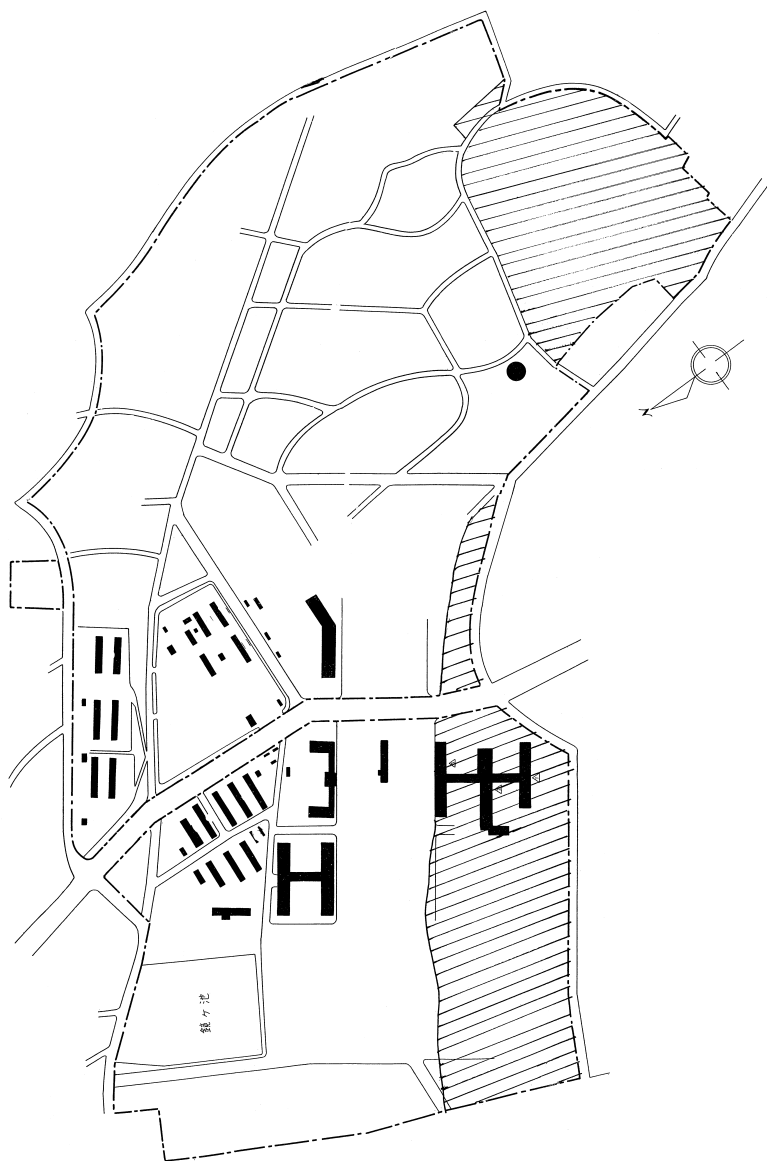


図2 1959年東山キャンパス図
斜線部が新規に取得した地区。(名大史ブックレット2より転載)

さて、先述の整備計画に基づいて東山地区への集中整備を行おうとした場合、大きな問題がありました。東山地区の敷地面積が不足するという問題です。当時、名古屋大学が愛知県からの寄付などによって所有していた東山地区の敷地は約一六万一〇〇〇坪（約五三万二二〇〇㎡）でした。このため、計画面積との不足分である約一二万坪（約三九万六七〇〇㎡）を隣接する民有地から取得することを計画していました。ただし、のちにこの追加取得の計画面積は約七万坪（約二三万一四〇〇㎡）に変更され、さらに最終的に一九六〇年度の段階で取得できたのは約四万四六〇〇坪（約一四万七四〇〇㎡）でした（図2参照）。

しかし、こうした一連の敷地追加取得の取り組みの成果もあって、東山地区の総敷地面積は約二二万坪（約六九万七五〇〇㎡）となりました。前章で紹介したように、名帝大創設時の「名古屋帝国大学官制理由書」には「愛知県ヨリ：敷地約一八万坪ノ寄附」と記されています。その点からいうと、名古屋大学は、名帝大創設後約二〇年を経てようやく予定敷地面積を確保できたということになります。

なお、こうした東山地区敷地の追加取得が可能になった背景には、愛知県と名古屋市の協力によって、対象となる土地が一九五四年一月に「名古屋都市計画学校名古屋大学事業決定区域」として建設大臣の指定を受けることができたという事情もありました。

◆各部署の東山地区移転

東山地区の敷地追加取得が進められたのに並行して、名古屋市内を中心に分散していた各部署による東山地区への移転も徐々に進められました。その際の懸案事項として、新校舎の建築費用をどのように確保するかという問題がありました。

しかし、それに対して名古屋大学は、当時のきわめて先駆的な試みとして建築交換という方法を考案することで問題を克服することができました。建築交換とは、相手方に新たに建物等を建築させて国有財産と交換する方法をいいます。工学部のあつた高蔵地区（名古屋市熱田区六野町）や経済学部のアつた桜山地区（名古屋市瑞穂区瑞穂町）、教養部のあつた滝子地区（同前）を利用した三度の建築交換によつて、工学部（一九五五年二月）・経済学部（一九五九年三月）・法学部（同年七月）・文学部（一九六三年一月）・教育学部（一九六三年一月）・教養部（一九六四年三月）など東山地区の主要な建物の建築が行われました。

三、豊田講堂の建設寄付

◆図書館・講堂建設の具体化

前章において何度も触れたように、名古屋大学では、一九三九（昭和一四）年の名帝大創設当時から「約束」に基づいて、図書館と講堂は地元からの現物寄付を受けるという方針が堅持されてきました。ただし、戦時下における物資不足、さらには戦後における物価高騰などによつて、その「約束」を実現できない状況が戦後もしばらく続いていました。

しかし、新制大学として再発足した名古屋大学が、医学部を除くほとんどの部局を東山地区に集結させることを内容とする「名古屋大学整備計画」を進める過程で、東山地区における図書館と講堂の建築計画の具体化が求められるようになってきました。

そこで本章では、ようやく実現の兆しがみえてきた講堂の現物寄付の経緯について、当時の名古屋大学事務局長を務めていた須川義弘による回顧録『半生を顧みる』（一九八二年）に基づきながら、紹介したいと思います。

◆名帝大設置期成同盟会からの寄付金

第一章で述べたように、名帝大の創設当時、名帝大設置期成同盟会は図書館と講堂の建設費として約一〇〇万円の寄付金を集めていましたが、戦前は物資不足などの理由によってその寄付金は名古屋商工会議所で保管されていました。また、戦後になつても、物価の高騰や預金封鎖などによって両施設の建設は困難な状況にありました。

その後、その寄付金は、名古屋商工会議所とも相談の上、名古屋市千種区の猫ヶ洞池付近の徳川山（現在の千種区徳川山町）の取得費用として活用されました。そして、さらにその後その土地は一部を残して名古屋市に売却され、その売却金は名古屋大学が文科系学部を創設した際の招へい教員用住宅（徳川山職員住宅）の建設費に活用されています。

◆講堂の建設を優先

東山地区の整備が進んでいた一九五〇年代後半、それまでは一体的に扱われていた図書館と講堂の現物寄付についての考え方が加えられました。それは、諸般の情勢から判断して図書館と講堂の二つの施設を同時に計画することは困難であるため、まずは講堂の建設を優先させるといったものでした。当時のようすについて、須川は次のように記しています。

(前略)：建築交換によつて東山地区の整備も漸次進んできたので、図書館と講堂の建設もそろそろ具体策を考える必要が起きてきた。：(略)：再度建設寄附金を集めるのは大変なことだし、また図書館と講堂の二つを同時に計画するのも困難なので、図書館は後廻しにして講堂を先に考えることにした。寄附金集めも、歴史の古い大学ならば卒業生を中心に募金するという方法もあるが、若い名古屋大学にはその手はない。地元の財界人から数万円ずつを集めるにしても、創設時と違つて今日では億という金はとて見込みはない。むしろ、東京大学の安田講堂のように、寄附者の名が付くような個人寄附による方が可能性がある、そんな篤志家はないものかと、勝沼総長とよりより話し合っていた。

(須川『半生を顧みる』一四一〜一四二頁)

◆トヨタ自動車工業株式会社への寄付依頼

こうして、勝沼精蔵総長と須川義弘事務局長によつて、講堂寄付を引き受けてもらえる篤志家探しが始まりました。引き続き、須川の回顧から当時のようすを紹介しておきましょう。

あれこれ思案中、ふと思いついたのが発明王と言われた豊田佐吉翁である。翁の残した事業の一つであるトヨタ自動車工業株式会社は、いま時流に乗つて発展を続けている。あの会



第3代名古屋大学総長
勝沼 精蔵



トヨタ自動車工業株式会社
石田 退三 社長

◆建設寄付の承諾

社に発明王豊田佐吉翁の記念事業として、学術研究の府である名古屋大学に講堂を建設寄附してもらうことは、受ける大学としても贈るトヨタとしても意義深いものがある。それに、勝沼先生は佐吉翁の女婿豊田利三郎氏の脈を取られた縁故もあるから話もし易いのでは、と先生に相談すると、「そうだ、それはよかろう」と早速石田退三社長を訪ねて下さった。

(須川『半生を顧みる』一四二頁)

このとき勝沼総長は、石田退三社長に対して、故豊田佐吉を記念する事業として総額一億円規模の講堂の建設寄付を依頼しましたが、当初はその承諾を得ることができませんでした。しかし、勝沼総長の三度目の依頼に対して、トヨタ自動車工

業(株)から建設寄付受諾の返事を得ることができました。

忘れもしないが、昭和三十三年（一九五八年―引用者）十一月二十四日本部応接室で学部長会の最中に、「石田社長から総長に電話です」と秘書が告げてきた。暫くして先生は会議の席に帰られて、側にいた私に小さい声で、「講堂を寄附してくれることになったよ、そして一億円ではなく二億円だ」と耳打ちして下さった。その時の嬉しさは今に忘れられない。向う様で既に二倍にして下さっている。∴（略）∴学部長会が終わると直ちに、勝沼先生のお伴をして名古屋駅前の豊田ビルに挨拶に行った。石田社長は∴（略）∴大学では一億円とのことだが、千八百席の講堂はどの位かかるのかと会社の技術部に計算させたら二億円以下では出来ないとのことだったので、折角寄附するのだから恥ずかしくないものをと、倍額にしたのだと話された。勝沼先生ともども厚くお礼を述べたのだった。

（須川『半生を顧みる』一四三頁）

◆講堂の設計打ち合わせ

講堂の建設寄付承諾の知らせを受けた日から一週間後の一九五八年一月一日、勝沼総長と須川事務局長は、名古屋駅前の豊田ビル内で四人の人物と打ち合わせを行っています。そのう

ちの一人は石田社長で、残る三名は竹中工務店の岩井支店長、同工務店の宮地設計部長、さらにワシントン大学（建築学）の榎文彦準教授でした。寄付される講堂は、榎準教授が設計を担当し、竹中工務店が建設を行うというのがトヨタ自動車工業(株)側の希望であったのです。須川の回顧によって当時のようすをみておきます。

大学としては、折角の二億円の大講堂だから安田講堂のように本部の事務室を入れる希望もあったが、石田社長は立派な講堂にしたいとお話だったので本部は入らないことにした。その代わり、会議室は大小三室を、また講堂ホールでは演芸等は行わないことにしてステージは移動式とし、これを取り除けば大円卓会議等もできるように、更に冷暖房等も維持費のかからない方式を希望した。本部は入らないことになったが、石田社長からは二階の一番眺めのよい所に総長室を、また総長室を作れば事務局長室も必要だし、貴賓室もなくてはならぬと助言があった。

（須川『半生を顧みる』一四三〜一四四頁）

◆建設工事の開始

その後、年末にはおおよその建設計画ができあがり、翌一九五九年二月七日付けで勝沼総長

から文部大臣あてに「建物建設寄附受領について」と題する認可申請書類が提出されました。この申請に対しては、同年三月一八日付けで文部大臣から寄付受領の「認可指令書」（学会第一四三号）が出されています。

そして、同年三月二四日には、トヨタ自動車工業(株)の関係者と大学側関係者が列席して鋳入れ式が行われました。なお、全体の工期については、石田社長の希望に応じて、一九六〇年二月中には工事を終了し、翌三月初旬には竣工式を行うことが予定されていました。

◆整備計画委員会への付議

一方、鋳入れ式に先立つ一九五九年三月一六日、名古屋大学の整備計画委員会（現在の整備委員会）において、トヨタ自動車工業(株)からの講堂建築寄付の件が提案・了承されました。同日の委員会では、寄付される講堂は一八〇〇席で、補助椅子を含めると二〇〇〇名を収容できる規模のものであること、建設場所については「従来から定められていた位置」とされており、「位置」については、資料上で確認はできませんが、おそらく現在の位置であると推測されます。

なお、講堂の規模については、同年七月二〇日開催の同委員会で総長室と会議室は設置するが事務局本部を設置できなかったことが報告されています。



豊田講堂の石膏模型

◆講堂名の確定

一九五九年三月二三日に開催された評議会で、勝沼総長から、①講堂の建設は株式会社竹中組(マヰ)が請け負うこと、②設計は竹中組(マヰ)の設計嘱託の榎文彦ワシントン大学準教授が担当すること、③名称は豊田講堂とすること、の三点について提案・説明があり、いずれも異議なく了承されました。

なお、講堂の名称を「トヨタ講堂」ではなく「豊田講堂」とした理由については、別の資料において次のように説明されています。

本講堂は寄附者が会社の創設者であり豊田織機の発明者である故豊田佐吉翁の記念として寄附されたものであるので本学受領の上は寄附者の意志を尊重して豊田講堂と呼称する

こととしたい。

(一九五九年二月七日付 会第一八七号 「建物建設寄附受領について」)

◆備品等の購入費用

トヨタ自動車工業(株)からの建設寄付の内容は、当然のことながら、講堂としての基本的な設備・附帯工作物を含めた建物施設の寄付に限られていました。しかし、二億円規模の立派な施設には、それに見合った調度品などが必要となつてきます。名古屋大学では、国費でそうした調度品を揃えるには無理があるとの判断から、その購入費用の捻出方法を考える必要が出てきました。

実は名古屋大学では、この調度品購入に際してもトヨタ自動車工業(株)に少なからぬ便宜を図ってもらっています。須川の回顧によって、それを紹介しておきます。

講堂内の設備は基本的なものは建物と共に整備されるが、足りないものは国費で補充しなければならぬ。豪華な建物と上等の基本設備に国費で作った粗末な什器では釣合いが取れないので、何とかしたいと考えた末、あまりにも厚かましいとは思ったが、会社が出す二億円のうち半分でも早く出してもらって、これを預金して利子稼ぎをしたいと願いますと、

石田社長は、「国費ではそうだろう、花井経理部長、何とかして上げられないか」と同情して下さった。同席の部長も社長の言葉ならと承知され、一億円を早速に出してもらって三井銀行に預金した。その利子は六百万円となって、設備の上で非常に助かったことも併せて感謝しなければならぬ。

（須川『半生を顧みる』一四五頁）

◆伊勢湾台風による工事の遅れ

一九五九年九月、台風一五号がマリアナ群島の東で発生し、この台風は硫黄島付近に達した頃には中心気圧八九四ヘクトパスカル、最大瞬間風速七五メートルの超大型台風に発達しました。全国で約五〇〇〇名の死者・行方不明者を出し、「昭和の三大台風」の一つである伊勢湾台風です。この伊勢湾台風によつて、名古屋大学では多くの教職員・学生が被災するとともに、大学の施設も甚大な被害を受けました。

当然のことながら、当時進められていた豊田講堂の建設工事も伊勢湾台風の影響を少なからず受けました。当時の現場主任は、「未曾有の伊勢湾台風に見舞われ、建込中の型枠の破損、事務所、下小屋、飯場の倒壊等で相当な痛手を受け、…（略）…工程上一カ月半の空白期間を過して、十一月上旬本工事を再開」したとの施工メモを残しています。また、この工事の遅れ



台風のおとあつづけを終えて作業再開のようす
(1959年11月15日)

に関連して、須川の回顧録には次のような記述もみられます。

竹中工務店は石田社長の指示どおり三十五年（一九六〇年―引用者）二月に完成するよう工事を急ぎ、前庭のコンクリート打ち等は厳寒期に入ったので、テントシートで覆って赤外線ランプをつけて凍結を防ぐなど随分苦勞し、費用もかさんで二億八千万円にもなつたそうだ：（略）：

（須川『半生を顧みる』一四五～一四六頁）

◆竣工

一九五九年三月二四日に始まつた豊田講堂新築工事は、一九六〇年三月六日に躯体工事が完了しました。すでに紹介したように、トヨタ自動車工業(株)の石田社長の希望は、一九六〇年二月中の工事完成、三月初旬

の竣工式の開催でしたから、伊勢湾台風による遅れを勘案すると工事そのものはきわめて急ピッチで進められたといえます。

一方、豊田講堂の竣工日は一九六〇年五月九日とされ、同日には次章で紹介する完成式典が開催されました。なお、この完成式典に先立ち、躯体工事完了後には一九五九年度卒業式と一九六〇年度入学式が豊田講堂で行われています。

以上、本章では、豊田講堂の建設寄付について述べてきました。この豊田講堂新築に関する工事概要をまとめると、表3のようになります。

表3 名古屋大学豊田講堂新築工事の概要

1. 建 築 地	名古屋市千種区不老町
2. 敷 地 面 積	375,851m ²
3. 構 造	鉄筋コンクリート造屋根シェル構造
4. 建 築 面 積	3,123.6m ²
5. 床 面 積	地下1階・地上2階・中2階付・塔屋3階建・ 建延6,270.22m ²
6. 客 席 面 積	固定席1,612席・補助席200席・ 計1,812席
7. 工 事 着 工	1959(昭和34)年3月24日
8. 軀 体 工 事 完 了	1960(昭和35)年3月6日
9. 工 事 竣 工	1960(昭和35)年5月9日
10. 工 事 施 行 者	株式会社 竹中工務店
11. 工 事 就 労 延 人 員	約50,000人
12. 主 な 設 備	冷暖房設備
13. 施 行 費	2 億 円

四、豊田講堂完成式典

◆『豊田講堂完成式綴 昭三五、五、九』

現在、本学事務局には『豊田講堂完成式綴 昭三五、五、九』と記された一冊の簿冊が保管されています。この簿冊は、完成式次第ほか式典開催に際して準備された書類等が約一九〇枚綴じ込まれており、巻末には当日配布された資料や豊田講堂完成を報じる当時の建築新聞記事（『日刊建設通信』一九六〇年五月二一日付）が添付されています。

本章では、この簿冊に基づいて、一九六〇（昭和三五）年五月九日に開催された豊田講堂完成式典について紹介したいと思います。

◆完成式典の準備

完成式典の具体的な準備は一九六〇年四月に入ってから行われました。右の簿冊に綴じられた資料によると、トヨタ自動車工業(株)、名古屋大学、竹中工務店の三者による初回の打ち合わせは四月四日に行われています。同日の打ち合わせにおいて、式の名称（名古屋大学豊田講堂



豊田講堂完成式典のようす

完成式)、開催日(五月九日)、式次第案、来賓祝辞依頼者、講堂紹介パンフレット作成などについて協議が行われています。

その後も数回の打ち合わせが行われていますが、式典準備関係書類のほとんどがトヨタ自動車工業(株)の社名入り書簡用紙を使用している点などから判断して、原案作成を同社が行った後に名古屋大学側との協議を行ったものと考えられます。

なお、四月二五日と同三〇日には、二回の式典リハーサルが行われています。

◆完成式典の出席者数

一九六〇年五月九日、いよいよ豊田講堂の完成式(竣工式)が開催されました。当日の記録によると、この式典に対する招待者数は五一八名で、このうち三三五名が出席しています。

招待者の出席者内訳は、中央官庁二名、愛知県内官公署一九名、中央・地方自治体一六名、大学関係二〇九名、諸団体一〇名、金融・証券会社六名、名古屋財界三名、報道関係一二名、

トヨタ関係二五名、施工者五名、その他二八名となっていました。

◆式典次第

資料によると、五月九日の豊田講堂完成式典は、午前一〇時から約一時間半の予定で開催されています（表4参照）。大学文書資料室には、講堂のステージ上に向って左側から順に名古屋商工会議所会頭、名古屋市長、愛知県知事、文部大臣、石田退三社長、勝沼精蔵前総長、松坂佐一総長、須川義弘建設委員、竹中錬一社長、榎文彦氏の席が用意され、式典が行われているようすを写した写真（三三三頁）が残されています。

この完成式典について、須川は次のように回顧しています。

名古屋大学とトヨタ自動車工業株式会社合同で行った完成式は盛大で、文部省関係者は勿論、愛知県知事、名古屋市長、名古屋商工会議所会頭、国会議員など、大学が日頃お世話になっている各界の方々その他多数の来賓を迎えたが、その中に名古屋帝国大学創設の功労者である田中廣太郎元愛知県知事と初代総長渋沢元治先生のお元気な姿があったことは、この上なく嬉しいことであつた。私もその年の三月に退官したが、建築委員は引き続き担当していた関係上、完成式には工事報告をした。（須川『平生を顧みる』一四六頁）

表4 豊田講堂完成式典次第

時 間	順 序	備 考
10:00～	開式の辞	広瀬課長
10:00～10:15	音楽演奏 (ハイドン「オックスフォード」)	名古屋放送管弦楽団
10:15～10:25	式辞	石田社長
10:25～10:35	設立経緯について	勝沼前総長
10:35～10:40	工事経過報告	須川建設委員
10:40～10:43	豊田講堂寄付目録贈呈	石田社長、勝沼前総長
10:43～10:48	感謝状贈呈 工事施工者 (株)竹中工務店 竹中 鍊一 殿 講堂設計者 榎 文彦 殿	石田社長
10:48～10:58	総長あいさつならびに感謝状授与 講堂寄贈者 トヨタ自動車工業株式会社 工事施工者 (株)竹中工務店 殿	松坂総長
10:58～11:03	文部大臣祝辞ならびに感謝状授与 講堂寄贈者 トヨタ自動車工業株式会社	文部大臣
11:03～11:15	来賓祝辞	愛知県知事 名古屋市長 名古屋商工会議所会頭
11:15～11:18	祝電披露	園次長
11:18～	万才三唱	愛知県知事
11:20	閉式の辞	広瀬課長

(注) 式終了後

1. 講堂内披露 (11:20～11:35)
2. カクテルパーティー (11:35～12:30)

◆感謝状の贈呈

さて、表4の式典次第の中には松坂総長による感謝状授与という事項があります。これは、豊田講堂の寄付を受けた名古屋大学として、寄付者であるトヨタ自動車工業(株)と工事施工者である(株)竹中工務店に対して感謝状を贈呈するというものです。学内に残された記録によると、それぞれの感謝状は次のような内容となっていました。

感謝状

トヨタ自動車工業株式会社

取締役社長 石田 退三殿

貴社は豊田佐吉翁の偉業を記念して近代建築として誇るべき講堂を寄付されました

本学は豊田講堂と命名し翁の創造精神を讃え教育研究の中心として学術文化の進展に寄与し

たいと思えます

ここに厚く感謝の意を表します

昭和三十五年五月九日

名古屋大学総長 松坂 佐一

感謝状

株式会社竹中工務店

取締役社長 竹中 鍊一殿

貴社は本学豊田講堂の建設にあたり豊富なる経験と優秀なる技術をもってよく寄付者トヨタ自動車工業株式会社の趣意を体し終始工事の完成に精進され本日ここに完工をみるにいたしました

よつて厚く感謝の意を表します

昭和三十五年五月九日

名古屋大学総長 松坂 佐一

◆記念品の贈呈

写真（三八頁）は、豊田講堂をデザインした木彫りのブックエンドです。このブックエンドは、豊田講堂完成式典の際に、記念品として参加者等に贈呈されました。もちろん特別注文によつて製作されたものです。

学内の記録によると、この記念品の準備についてはトヨタ自動車工業(株)が担当し、同社が(株)松坂屋に製作を依頼したとされています。その製作数は八〇〇個で、四月七日に発注して五月



記念品のブックエンド

三日に納品されたとの記録があります。

五、ランドマークとしての豊田講堂

◆寄贈「趣意書」

前章で紹介した簿冊『豊田講堂完成式綴』には、講堂の寄贈者であるトヨタ自動車工業(株)が準備した次のような「趣意書」が綴じ込まれています。

趣意書

世界的自動織機の発明者故豊田佐吉翁、および国産自動車工業の発展確立に貢献した故豊田利三郎氏、故豊田喜一郎氏は常に発明研究

と人材養成に対する深い関心と熱情をもつてその終生の事業を完遂された。

この豊田講堂は、このたび名古屋大学がこの景勝の丘陵地に雄大な構想をもつて新校舎を建設されるのを機会に、これ等先覚者の遺志を体し、トヨタ自動車工業株式会社が寄付するのである。

本講堂が、中部日本の教育の中心地として教育の振興、科学の発展の一助となることを切望して止まない。

昭和三十五年 月 日

寄贈者 トヨタ自動車工業株式会社

取締役社長 石田 退三

今日、豊田講堂は、石田社長の期待どおり、まさに名古屋大学の中心的存在になっているといつても過言ではありません。そこで本章では、今日における豊田講堂の意義などについて述べておきたいと思えます。

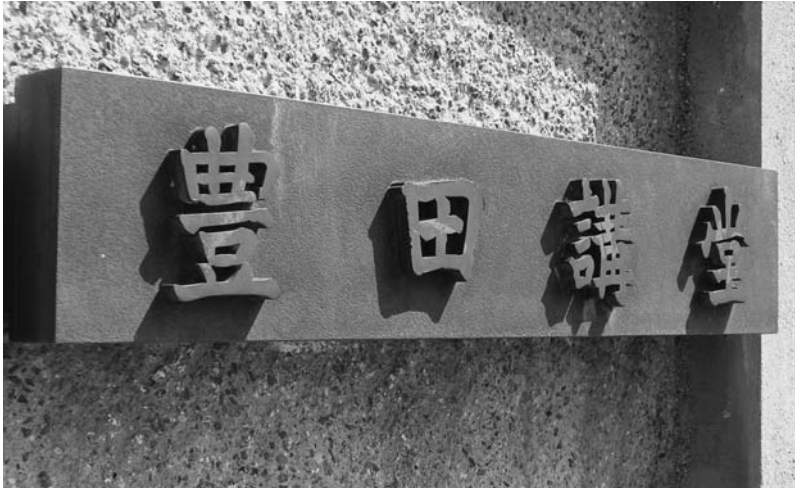
◆豊田講堂の存在

豊田講堂は、一九六二（昭和三七）年度日本建築学会賞を受賞した建物ですが、現在の名古屋

屋大学にとっていろいろな意味において欠くことのできない建物となっています。たとえば、豊田講堂が、名古屋大学（東山キャンパス）の目印あるいは象徴的な建物―ランドマーク―となっていることは、学内外の人々が認める場所であると思います。

また、とりわけ名古屋大学の学生にとっては、キャンパスライフの始点と終点である入学式と卒業式の会場として、記憶に深く刻まれる建物の一つが豊田講堂であるといえます。さらに、豊田講堂は、学内最大の人員収容能力を持ち、全学的イベントをはじめとして、各種学会、学術シンポジウム・フォーラム、名大祭などの会場として最もふさわしい建物でもあります。

ところで、皆さんは、豊田講堂正面の屋外演壇壁面に一枚のプレートがはめ込まれているのをご存知でしょうか。また、南側ロビー内の講堂入口付近に一体のブロンズ胸像があるのをご存知でしょうか。前者のプレートには、勝沼精蔵総長の揮毫による「豊田講堂」との文字が記されています。そして後者は、その勝沼精蔵の胸像です。豊田講堂と勝沼精蔵―名古屋大学史上、この両者を切り離して語ることはできないと思われる。名帝大創設当時の「約束」が沢元治初代総長、田村春吉第二代総長を経て、勝沼総長の在任中に実を結んだという事実は、豊田講堂の存在をより意義深いものに行っていると思われまます。



勝沼総長の揮毫によるプレート

◆豊田講堂とシンポジオン

一九九二（平成四）年一月、豊田講堂の東側に隣接して名古屋大学シンポジオン（以下、シンポジオンという）が竣工し、同年三月には落成記念式典と祝賀会が開催されました。このシンポジオンは、名古屋大学創立五〇周年記念施設として建築されたもので、名古屋大学創立五〇周年記念事業後援会（会長は名古屋商工会議所会頭）が名古屋大学に建設寄付したものです。

当初、記念施設（シンポジオン）は、豊田講堂から東側に少し離れた職員会館に隣接して建設することが計画されていました。しかし、豊田講堂との一体的な運用も可能となるようにとの理由もあつて、後にその計画が変更されて講堂のすぐ東隣に建設されたのです。

また、シンポジオンのデザインについても、竣

工後三〇余年を経た豊田講堂とのデザイン的な調和・統合をはかるというテーマに基づいて設計がなされています。

◆豊田講堂の改修等

一九八九年の名古屋大学創立五〇周年に際して、豊田講堂は改修を受けています。改修の内容は、講堂の内・外装の改修等、ホール内の調光・照明設備の更新、講堂内会議室の空調設備

の更新・増設などです。

この改修に必要な経費は、トヨタ自動車株式会社からの二度にわたる寄付（総額二億五〇〇〇万円）によって賄われました。

なお、豊田講堂は、シンポジオンが完成した一九九二年度に会議室を中心として設備・備品等の更新・増設が行われています。また、翌一九九三年度には



夜、青色発光ダイオードが光る豊田講堂時計台

ホール内の椅子の更新が行われています。

また一九九四年、時計台の文字盤および時計・分針に、夜間赤色に光る発光ダイオードによるイルミネーションが施されました。

そして二〇〇一年には、豊田合成株式会社の寄付により、現在の青色発光ダイオードによるものになりました。青色発光ダイオードは、二〇一四年にノーベル物理学賞を受賞した、赤崎勇特別教授と天野浩特別教授が、名古屋大学工学部にそれぞれ教授、助手として在職中に実現に成功し、豊田合成によって実用化されたものです。豊田講堂の入口には、その旨が記された銘板が設置されています。

◆豊田講堂の利用

豊田講堂の利用は、当初は大学の儀式や重要会議などに使用し、学外者の使用に関しては、そのつど学部長会で審議を行っていたようです。その後、学外者による講堂使用の要望が増加したこともあって、一九六〇年一月には「豊田講堂使用に関する暫定規程」と「豊田講堂使用に関する暫定規程施行細則」を制定しています。また、一九六九年一月には「学内者の豊田講堂使用に関する暫定申合せ」が評議会にて決定されています。

現在は、「名古屋大学豊田講堂等使用に関する規程」および同規程施行細則によって運用さ

れています。名古屋大学や部局の儀式や会合等以外でも、「本学の教育研究の進展に資するとともに、学術文化の向上に寄与することを目的する」ものであれば、名古屋大学の使用に支障のない限り、学内者学外者を問わず、使用が認められます。その際、使用日の三週間前までに総長に申請書を提出し、使用許可を得る必要があります。

なお、使用料（一時間当たり1㎡につき二八円）については、使用目的や主催者、参加者などに応じて、全額負担から無料までのケースがあります。

六、現在の豊田講堂

◆歴史的建築物として

東山名大豊田講堂は、東山における名大の総合学園の核となるものである。この意味に於て設計は当初より一貫して講堂設計即学園環境設計として進めた。：（略）：こうした設計の意図が充分汲み入れられ、この講堂及び広場を中心にして今後更に活発な学園建設が行われるようになれば、それは設計者のもつとも喜びとするところである。

（『日刊建設通信』一九六〇年五月二一日付）

右の文章は、豊田講堂の設計者である楨文彦氏が、講堂竣工直後に記したものです。

二〇〇五（平成一七）年、豊田講堂は竣工四五周年を迎えました。この間、名古屋大学を含めた東山地区周辺は大きく様変わりしました。しかしその一方で豊田講堂は、楨氏が望んだように、大学整備の骨格としてつくられたグリーンベルトの軸上に位置づけられ、きわめてモニュメンタルな建物となりました。



豊田講堂完成直後の東山キャンパス

また、一九九三年一〇月、豊田講堂は名古屋市より「都市景観重要建築物」の指定を受けました。これは、戦災で多くの建物を焼失したため歴史的建造物が少ない名古屋市にとって、都市景観を形成していく上で地域のシンボルとなるような重要建築物を守っていくことを目的としたものです。

さらに、二〇〇三年には、モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighbourhoods of the Modern Movement) の日本支部である DOCOMOMO JAPAN による「DOCOMOMO in Japan 近代建築100」に選ばれました。豊田講堂は、日本を代表する近代建築として認められたのです。

◆ 豊田講堂の改修・増築工事

しかし豊田講堂は、一九六〇（昭和三五）年に完成して以

来、比較的小規模な改修工事はあったものの、大規模な改修・増築はなされておらず、その歴史的意匠は別にして、建物や施設の老朽化がいちじるしくなっていました。大学のシンボルにふさわしい、さらに利用者のニーズにあった改修を行うことが、名古屋大学の大きな課題となっていたのです。そしてそれは、法人化後の限られた財源を考えれば、容易なことではありませんでした。

そのようななか、四五年前に豊田講堂を建設寄付していただいたトヨタ自動車株式会社（建設当時はトヨタ自動車工業株式会社）、およびトヨタグループ各社の寄付により、豊田講堂の全面改修・増築工事が行われることになったのです。これを、昨今の名古屋大学の最も大きなニュースの一つとして数えることは、おそらく大方の人の支持をいただけるものと思います。

しかも、四五年前と同じく、楨文彦氏（株式会社楨総合計画事務所代表取締役）が設計を担当し、竹中工務店が工事を施工することになったことも、大変感慨深いものがあります。とくに楨氏は、当時三一歳の新進の建築家でしたが、この豊田講堂を出世作として、今や日本を代表する世界的建築家となっています。二〇一三年には、日本芸術院賞・恩賜賞を受賞、文化功労者にも選ばれました。

改修・増築工事は、二〇〇六年一月二八日に起工式が行われ、同年一二月二〇日に着工、翌二〇〇七年一二月二五日に竣工し、同日に完成修祓式が行われました。

◆意匠の保存継承と新施設

それでは、ごく簡単にはありませんが、リニューアルされた豊田講堂について紹介したいと思います。

まず外観ですが、耐震補強が施されながらも、少なくとも前方から見る範囲では改修前と全く変化はありません。これは、豊田講堂の建築物としての歴史的価値を尊重することを最優先し、日本を代表する近代建築の意匠を保存継承するため、あえてそのようにしたからです。豊



豊田講堂とシンポジオンをつなぐホワイエ

田講堂の大きな特徴の一つである、木型の木目を表面に残したコンクリート打ち放しも、見事に再現されています。

ただし、後方から見ますと、改修前と大きく異なる点があります。それは豊田講堂と、以前はその後ろ側に独立した建物としてあった名古屋大学シンポジオンが、ホワイエ（アトリウム）によってつながれ、一体

化したことです。

また、このホワイエは、約六〇〇㎡の面積と約一〇mの高さを持ち、二つの建物を有機的にむすんで、それぞれの機能を拡張するものとなっています。従来は吹きさらしの半屋外空間となっていた二階のピロティも、屋内ロビーとしてホワイエの大空間と連結し、展示用の可動パネルを設置して、新しい情報発信拠点としても使えるようになりました。

◆ホール性能の改善

講堂本体にも、多くの機能性や快適性の改善がなされました。

客席は、固定椅子の幅や前後の間隔を従来よりも広げるなど、ゆったりと快適に座れるようにしました。さらに、一階の客席には収納式テーブルを設けて、ノートパソコン等の利用に供し、電源やLANシステムも使用できるようになりました。また、空調設備を抜本的に改善し、ホール背面の上部から吹き降ろす全体空調方式から、客席の段床部に吹き出し口を設けて床面付近を効率的に空調する、居住式空調方式を採用しました。照明設備も、操作性を改善し、イベントごとにシーン設定をワンタッチで切り替えられるようにしたほか、ステージ・客席それぞれに適した照度の確保ができるようになりました。

音響設備は、シンプルな操作で意図した効果を得られるようにシステムを再構築したほか、



改修後の舞台から見たホール全景

壇上の講演者が自分の声を聴き取りにくいという従来の問題点を、「跳ね返りスピーカー」によって解消しました。また、客席エリアに小型スピーカーを多数設置し、どの座席にいても音声を明瞭に聴き取れるように配慮しています。

舞台の機能も大幅に拡充されました。改修前までの舞台は、中央部に長方形のステージが置かれただけの簡素なもので、バックヤードもほとんどなく、利用形態が制約されていました。これを改善するため、袖舞台を新設し、機器操作や出待ちスペースとしての利用等に対応するとともに、ステージを可能な限り拡張しました。ステージのみの部分空調も設けられ、サークル活動の稽古や練習なども快適に行うことができます。

◆竣工式・竣工記念ホームカミングデイの開催

二〇〇八年二月二日、豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイが、豊田講堂において約二五〇〇人の参加者を得て盛大に行われました。

ホームカミングデイは、名古屋大学の活動を同窓生や学生のご家族、地域住民の方々にご覧いただくため、二〇〇四年度から毎年秋に開催しているものです。今回は、前年秋の分を竣工式の当日に移動させての開催でした。竣工式終了後、「ものづくりの源流」をテーマに、トヨタ自動車が開発した「トヨタ・パートナロボット」によるパフォーマンス、九代玉屋庄兵衛氏によるからくり人形の実演がありました。また、午後からの竣工記念パーティー（シンポジオンホール）のあとは、トークセッション「日本の教育を考える」が開催されました。

竣工式では、豊田章一郎全学同窓会会長、松原武久名古屋市長とともに、榎文彦氏の祝辞がありました。榎氏は、約半世紀前の講堂建設当時の思い出をまじえて祝辞を述べましたが、その中で、正面から見た豊田講堂のデザインは、門の略字「冂」になぞらえたものであるとの話を聴くことができました。ホールの天蓋が、冂の中央の点にあたるということです。

半世紀前も現在も、名古屋大学には明確な正門がありません。すでに榎氏は建設当時から、豊田講堂について「門としての建物」という言い方をしていますが、この半世紀のあいだ、豊田講堂は象徴化された正門としての役割を果たしてきたといえるのではないのでしょうか。

◆BELCA賞を受賞

この豊田講堂の改修・増築工事は高く評価され、二〇一一年二月に第二〇回BELCA賞（ベストリフォーム部門）を受賞しました。

BELCA賞は、公益社団法人ロングライフビル推進協会（BELCA: Building and Equipment Long-life Cycle Association）によって創設されたものです。応募の中から、適切な維持保存や優れた改修を実施したとくに優秀な建築物の関係者を表彰する、我が国初の既存建築物の総合的表彰制度です。ベストリフォーム部門は、改修後一年以上五年未満の建築物で、その改修によって画期的な活性化を計った物件のうち、とくに優秀な建築物を対象としています。

選考講評では、歴史的文化的価値の高いモダニズム建築である豊田講堂に対し、外観を保全しつつ機能性の向上やシンポジオンとの一体化をおこない、「建物を使い続ける」という大学の明確な意思とそれに応えた技術側の努力が建築の活性化、長寿命化を実現した優れた範例である。」と評価されました。

◆国の登録有形文化財となる

そして二〇一一年七月、「名古屋大学豊田講堂」が国の有形文化財として登録されました。



豊田講堂に掲げられている有形文化財の登録プレート

この登録は、文化財保護法にもとづき、所有者の希望を受けた文化庁が文化審議会に諮問し、その答申をへて決定されるものです。名古屋大学としては、鶴舞キャンパスにある愛知県立医学専門学校（医学部の前身）および愛知病院（医学部附属病院の前身）の門と外塀あわせて三件（二〇〇七年）以来の四件目の登録となりました。

名古屋大学は、名古屋帝国大学としての草創期に、物資・資金不足のため東山キャンパスに突貫工事の簡易な建築物しか建てられなかったこと、あるいは空襲のため鶴舞キャンパスが甚大な被害を被ったことなどから、その頃の建築物が現在に残っていません。その意味でも、大学のシンボリックな建築物が文化財として認められたことは、きわめて大きな意義を持つていると思います。

おわりに

豊田講堂は二〇一二（平成二四）年、第一三回公共建築賞（一般社団法人公共建築協会）において、公共建築賞・特別賞を受賞しました。同賞は、建築として企画・設計・施工が優れていること、地域社会への貢献が著しく、文化性が高いこと、施設管理、保全が良好に行われていること、という三つの視点から公共建築物を評価するものです。

受賞理由は、指定文化財であるとともにモダニズム建築の代表作である豊田講堂を、市民交流の拠点として増築・改修し、改修後は講習会、学会、市民フォーラムなど多様なプログラムに利用され、利用率も大幅に向上しており、今後もこの施設を永く使っていくこうとする大学の姿勢が感じられ、公共建築の一つのあり方を示したものである、されています。

BELCA賞もそうでしたが、建築物としての意匠だけではなく、建築後の歴史、そして名古屋大学が示したその未来像も合わせて評価されているのです。その意味では、名古屋大学は、今まさに豊田講堂の価値を創造しているとも言え、我々の責任は大きなものがあります。

本書では、豊田講堂の沿革や名古屋大学における存在意義などについて述べてきました。名

帝大創立時からの「約束」が戦後もなかなか実現しない状況にあつて、もしトヨタ自動車工業による「約束」の継承がなかったならば、おそらく現在ののような東山キャンパス風景は存在していただろうと思われます。

本書を終えるにあたつて、一九六〇（昭和三五）年五月九日の豊田講堂完成式典における、名古屋大学の松坂佐一総長によるあいさつの一部を引用しておきます。今日、豊田講堂は、竣工後五六年の歳月を経て、その存在が当然のこととして受け止められています。本書を通じて、名古屋大学の中心としての、またシンボルとしての大学講堂の存在を、これまで以上に再認識していただくことができれば幸いです。

大学は、学部や研究所の単なる連合体ではなく、そこで研究される諸科学の統一をその理念とするものでありますが、大学における講堂は、まさに、そのシンボルともいうべきものであります。名古屋大学が東山地区に集結するに当つて早くもここに、トヨタ自動車工業株式会社の御寄贈によつてこのような立派な講堂が竣工しましたことは、真に名古屋大学に心ができたように感じて、喜びに耐えませぬ。

（『日刊建設通信』一九六〇年五月二一日付）

引用文献・主要参考文献

- 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一（名古屋大学、一九九五年）
 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史二（名古屋大学、一九九五年）
 須川義弘『平生を顧みる』（私家版、一九八二年）
 神谷智『名古屋大学 キャンパスの歴史―学部編』（名大史ブックレット2、二〇〇一年）
 堀田典裕・木方十根『豊田講堂と古川図書館―名古屋大学の寄付建物―』（名大史ブックレット4、二〇〇一年）
 『名古屋大学 豊田講堂 一九六〇』（名古屋大学、一九六〇年）
 『豊田講堂完成式典綴 昭和三五、五、九』（名古屋大学文書資料室所蔵）
 『日刊建設通信』（一九六〇年五月一一付）
 『TOYODA AUDITORIUM』（名古屋大学豊田講堂改修竣工式・同竣工ホームカミングデイ配布パンフレット、二〇〇八年二月二日）
 『名大トピックス』第一六四号（二〇〇七年一月）、第一七三号（同年一〇月）、第一七七号（二〇〇八年二月）、同一七八号（同年三月）
 「ちよつと名大史」（名古屋大学文書資料室ホームページ（<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/>）、初掲載は『名大トピックス』各号）。
 一般社団法人公共建築協会ホームページ（<http://www.pbaweb.jp/>）

著者略歴

山口 拓史（やまぐちたくじ）

一九六二年 兵庫県神戸市生まれ

一九九四年 名古屋大学大学院教育学

研究科博士課程（後期課程）単位取得

満期退学 教育学修士

現在 愛知学院大学教養部准教授

専攻 高等教育史、アーカイブズ学

堀田 慎一郎（ほったしんいちろう）

一九六九年 愛知県豊橋市生まれ

二〇〇〇年 名古屋大学大学院文学研

究科博士課程（後期課程）修了 歴史

学博士

現在 名古屋大学文学書資料室特任

助教

専攻 日本近代史、アーカイブズ学

【執筆担当】

一～四：山口、六：堀田、

はじめに・五・おわりに：山口・堀田

名大史ブックレット9

豊田講堂

—— Toyoda Auditorium ——

二〇〇四年九月三〇日 第一版発行

二〇一〇年三月一五日 第二版発行

二〇一六年九月三〇日 第三版発行

著者 山口 拓史

堀田 慎一郎

編集発行 名古屋大学文学書資料室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

電話 〇五二（七八九）二〇四六

印刷所 株式会社 クイックス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町一九一〇

電話 〇五二（八七一）九一九〇

名大史ブックレット

シリーズ 既刊本

-
- ① これまでの大学院・これからの大学院
山口 拓史 2000年12月刊
-
- ② 名古屋大学 キャンパスの歴史Ⅰ（学部編）
神谷 智 2001年2月刊
-
- ③ 名古屋大学 スポーツの歩み
高橋 義雄 2001年3月刊
-
- ④ 豊田講堂と古川図書館—名古屋大学の寄付建物—
堀田典裕・木方十根 2001年12月刊
-
- ⑤ 名古屋大学最初の外国人教師—ヨングハンス先生とローレツ先生—
加藤 鉦治 2002年3月刊
-
- ⑥ 草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治
神谷 智 2003年3月刊
-
- ⑦ 名大祭—四〇年のあゆみ—
山口 拓史 2003年3月刊
-
- ⑧ 岡崎高等師範学校—新制名古屋大学の包括学校③—
山口 拓史 2004年3月刊
-
- ⑨ 豊田講堂—*Toyoda Auditorium*—
山口 拓史・堀田慎一郎 2016年9月第三版刊
-
- ⑩ 名古屋高等商業学校—新制名古屋大学の包括学校②—
堀田慎一郎 2005年3月刊
-
- ⑪ 農学部の誕生と安城キャンパス—学部の誕生と草創期①—
堀田慎一郎 2006年3月刊
-
- ⑫ 第八高等学校—新制名古屋大学の包括学校①—
山口 拓史 2007年3月刊
-
- ⑬ 名古屋大学 歴代総長略伝—名大をひきいた人びと—
堀田慎一郎 2009年3月刊
-
- ⑭ 名大祭—五〇年のあゆみ—
山口 拓史・堀田慎一郎 2011年3月刊
-



表紙写真：豊田講堂とグリーンベルト（2008年）

裏表紙写真：ライトアップされた豊田講堂（2008年）